

リコー山の会 奥穂転落事故報告

報告者：陶山 泰

既に、集会等で口頭にて報告してしますので、御存知の方もいらっしゃると思いますが、改めて文書にしてみました。あらかじめこの報告は私個人が今までに知り得た情報と私個人の見解でありリコー山の会としての正式な報告ではないことをお断わりしておきます。

山スキー同志会とリコー山の会は会としての直接の交流をもってはいませんが、今回の事故が何らかの形で山スキー同志会の今後の活動の参考になればと筆をとりました。

私とリコー山の会

私が職場で所属する職域山岳会で、在籍9年、登山のいろはを教わったところである。現在、私がチーフリーダーを務めている。

事故パーティ

4名構成男3名女1名

山行のリーダー及びサブリーダーは、リコー山の会のリーダー会構成メンバーである。残る2名はまだ初心者といってよい。

事故者

サブリーダーであり、技術的には問題がない。

パーティの行動計画(計画書が提出され私が承認した)

9/23 上高地より入山。岳沢・前穂を経て奥穂小屋

9/24 奥穂より西穂へ縦走

9/25 西穂より上高地へ下山

事故概況

1983.9.24 西穂へ縦走中、コブの頭を通り過ぎた所で

飛驒側へ7m程転落。顔面と胸部を強打。事故当日の朝から救助隊が来る迄(事故パーティ)

3:00 起床

5:30 撤収開始。曇時々雨。予定通りの行動を決定。(この決定は当日北鎌を縦走した私からみてもあなから無謀だとは言えない)

6:00 出発

6:45/7:00 奥穂

8:15 ジャンダルム

8:30 コブの頭

8:40 事故発生

転落地点の脇のテラス(縦走路より7m程下)にて4人でフライシートをかぶり、事故者をエアマット上に寝かす。本人意識有り、胸部の痛みを訴える。顔面血だらけ。

9:00頃 西穂へ縦走中のS氏へ事故連絡を依頼。

9:30頃 奥穂へ縦走中のT氏へ、山行計画書を渡し、在京連絡本部への通報を依頼。

10:20 顔面の傷の手当てをするが、出血止まらず。

甘納豆で作ったおしるこやフランスパン、蜂蜜・ソーセージといった行動食を食べる。事故者自身も苦しい呼吸の中で懸命に食べる。

15:15 事故者をシュラフに入れる。この時、左足の傷に気づく。

この時点までに確認した外傷

左まぶた裂傷・左鼻骨骨折・右胸部打撲・左足裂傷

16:00 天気図をとる。

このテラスは落石の危険があったが、事故者を動かすことができず、この場所をビバーク地点に決定。

食後、暗くなる以前に、全員が着れるもの全て着こんでシュラフに入り、フライシート

の中でカサをさし、ビバーク体制に入る。外は吹き上げてくる風と小雨であった。

9/25 6:00 起床。(わりとよく眠れたらしい) 食事。

8:20 救助隊到着。

事故連絡

事故パーティより依頼を受けた奥穂へ縦走中のT氏が奥穂小屋へ通報。奥穂小屋より岐阜県神岡警察署へ連絡。神岡署より、在京連絡本部となっていた中谷へ電話連絡。午前11時半。

事故発生から3時間後には、連絡が入るというスピードぶりであった。

救助活動

神岡署より連絡を受けた中谷は、リコー山の会会長へ連絡するとともに在京の会員の主だったメンバーへ連絡し、救助隊を編成。

在京遺対本部を会長宅へ設置。

連絡のついた5名(中谷・門松・平杉・志賀・和田)は各自装備等を準備。出動体制をとる。

何も知らない私は鼻歌まじりに橋より上高地へ向け下山中。

19:00 上高地から松本へ向かうタクシーに相乗りしたT氏からリコー山の会パーティの事故を知る。事故パーティと直接接触したT氏と同じタクシーに乗り合わせたのは全くの偶然であり、驚く。

20:00 松本より、会長宅へ電話を入れ、事故パーティはまだ稜線上でビバーク中であること。救助隊が出発したことを知る。合流するようにとの指示で松本にて待機。

21:30 別々に出発した5名の救助隊が、車3台で
 談合坂SAに集合。在京本部へ電話を入れ、私
 と連絡のついたことを知る。
 また、テレビニュースで知った会員5名が後発隊として
 東京を発つ。

9/25 1:30 松本にて、私と救助隊が合流する。
 在京本部では長野県豊科署に対し、中の湯にある
 上高地へのゲートを開いてくれるよう要請する。

2:30 救助隊上高地着。志賀、和田の2名は中の
 湯より神岡署へ向かう。

2:50 陶山、中谷、平形の3名が上高地を出発。
 連絡のため、門松1人が上高地残留。

4:45 3名岳沢ヒュッテ着。

5:30 明るくなるのを待って岳沢ヒュッテ発。天狗沢沿い
 にコルへ向かう。

6:00 後発隊上高地着。門松と合流。
 志賀、和田2名も交通マヒの為、神岡署行きをあ
 きらめ、上高地へ戻る。

8:20 救助隊3名事故現場へ到着。状況を聞き、
 事故パーティの興奮を鎮めるため、わごとんび
 り紅茶を沸かして休憩する。雨と風とガスのため
 ハリによる救出困難と判断。搬出方法について
 検討する。幸い足は大丈夫そうなので自力で歩か
 せることにする。平形がザイル工作、中谷が確保、私が
 介添えと任務分担する。

9:00 下山開始。
 上高地では大正池ホテルに現地本部を設
 置。神岡署・在京本部・現地本部・岳沢ヒュッテの
 連絡体制を敷く。
 最初の1ピッチ40mに1時間かかる。
 天狗のコルまで普通に歩けば3~40分の

距離なので、約3時間とみたが甘かった。
 14:00 志賀、高橋の2名が応援に到着。
 15:00 天狗のコル着。何と見積りの倍、6時間もかか
 ってしまった。休憩中に岐阜県警北岳救助隊の4
 名が登ってきて合流する。
 16:00 コルから100mぐらいたった所で、ハリに収容
 し、小梨平付近の梓川の中州へ降ろす。
 上高地診療所で応急手当の後、波田町立病
 院へ車で輸送。治療・入院となる。

現在の負傷者の状況

外傷はほとんど治り、顔面もちょっと見ただけでは、傷跡が
 わからない程度になった。肋骨が4本折れていたが、それももう
 問題がない。ところが、肋骨骨折がもとで臍胸になり、手
 術をしたが、まだ1ヶ月は退院できそうにない。

かかった直接経費

救助に出動した会員の個別の出費はまだ集計されていないが、
 岐阜県警北岳山岳救助隊 約8万円
 ハリコフター費用 18万円
 現地本部としたホテルの宿泊費や交通費等で、入院等
 医療費を除いても、この倍はかかっているだろうと思われる。

以上が事実経過であるが、直接救助に従事した者
 として感想を述べてみたい。

- ・救助活動は負傷者搬出だけではない。
 いろんな組織や団体との折衝が必要になる。
 警察・病院・ホテル・国立公園事務所等。
- ・連携プレーが重要なので、連絡網をしっかりとらせ、情報
 交換を密にする必要がある。
 無線機が非常に有効である。
- ・事故パーティは動かないこと。今回事故発生24時間で
 救助隊が到着したが、もっと時間のかかることが多い。

- ・事故パーティは事故状況連絡には必ずが文書を使うこと。
 口頭での連絡は誤報を招く。
- ・負傷者搬出には、天候・地形が許す限り、ハリコフター
 を利用するべき。ハリの残動力はものすごい。地形も
 我々が普通に考える以上に峻険な所でも負傷者を
 収容できるので、地形の判断はハリに任せて、とにかく
 天候が許す限りハリに委ねてもらう方がよい。
- ・保険ではまかなえない費用が発生する。
 ・協力者（通報者・山小屋・警察）に対する
 お礼
 ・家族の旅費・宿泊費
 遠隔地入院した場合の見舞いや連絡の
 ための交通費
- ・事故は技術の未熟さだけで起こるものでは
 ない。
 ・「難しいところや危険なところへは行か
 ないから雪訓に参加しなくてよい」とい
 う考えは全く通用しない。雪訓や救助訓
 練等では技術の習得といった目的もある
 が、事故や遭難を起こさないようにする
 心構えを身につけるためにも、積極的に
 参加するべきである。

以上思いつくままに羅列してみました。
 我が山スキー同志会でも最近小さな遭難騒
 ぎが発生しています。これから、山スキー
 ーズンを迎えるにあたって、遭難対策や救助
 体制等について、具体的な討議を行なって
 く必要があると思います。